

であい



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC / ハイエック
(旧 社団法人北方圏センター)
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center



フィリピンの子どもたちとじゃんけん列車

★大雨、洪水の中で

振り返ると、初日の航空会社の事情によるトラブルから何かが始まっていたのかもしれない。1日遅れてマニラに到着すると市内は大雨だったが、雨季ゆえ大きな問題とは思えなかった。しかし、ツアー3日目になっても雨は降り止まず、現地ガイドが鬼気迫った表情で「これは異常な雨量です。もしかしたら今日は目的地に行けないかもしれません」との話。不安を抱えたまま出発してから数時間後、政府から緊急事態宣言が出され高速道路は閉鎖、学校やお店も全て休みになり、当初の予定は変更を余儀なくされた。何カ月もかけて準備してきた高校生はフィリピンの子どもたちに会えなくなるのではとさらに不安な表情に。しかし、現地の方々のご協力のもと、多少の時間短縮はあったものの奇跡的に予定していた訪問先全てを訪れることができた。



小学校まであと少し裸足になって冠水した道を歩きました

★雨のおかげで思いがけない機会も

何よりもこの雨のおかげで、災害時にも関わらず温かく迎え入れてくれるフィリピンの子どもたちやスタッフの方々の優しさ、水で溢れた道を目の前に困っている日本の高校生に手を差し伸べてくれた村の人の温かさにも触れられ、車いすを届ける際には思いがけず災害緊急センターを訪問する機会に恵まれ、さらに防災担当大臣にお会いするというあり得ない経験もすることもできた。初めは大雨と洪水のせいで何もできないのではという状況だったが、この厳しい状況だったからこそ多くの経験や感動を得ることができた。



災害支援センターで大臣と記念撮影

★何カ月もかけて体験を話し合っ

帰国後、高校生は2グループに分かれ出身の中学校や在籍する高校でフィリピンでの体験を報告会という形で発表した。何カ月もかけて現地での体験を話し合っ準備をし、当日は堂々とした姿で自分たちが見て感じたことを伝えることができた。報告会後のアンケートでは「暗いイメージを持っていたけど、フィリピン人の優しさや笑顔の印象が変わった」、また「(高校生が)海外へ行き積極的に活動しているのがすごい。私も見習って視野を世界へ広げていきたい」などの感想があった。高校生が自らの言葉で発したメッセージが、次の世代の国際協力の輪をさらにさらに広げていった。



やっと出会えたフィリピンの子どもたち

特集

高校生が見たフィリピン — 高校生・アジアの架け橋養成事業 —



**無いものがある分、
目の前のものを見つめられた**

安達 智子 さん

「なんて空が青いのだろう」初めてタンザニアに到着し見上げた空の青さが忘れられない。

憧れのアフリカの地に今立っている。到着し、まずは語学研修。「ジャンボ!!」でおなじみ?のスワヒリ語。1カ月の研修の後、任地での生活が始まった。最初の1~2カ月は、現地での生活に慣れることで精いっぱいだった。水道のない生活。電気があれば、「ラッキー」と思えた。家の中を駆け回るネズミ達、屋根の上のフクロウ、コウモリ…家をじわじわと食べる白アリ。数々の生き物たちとの共生は忘れられない。お腹は壊したが、これは隊員誰もが通る道。

言葉がわからないうちは、村人がよくお金を借りに来た。村の子供たちは毎日、朝夕、沼に水汲みに行く。料理をするには炭おこし、または薪に火をつける。雨が降ったらバケツに水をためる。生きるには時間がかかるということを痛感した。水不足で学校が臨時休校になったこともあった。ないものを数えれば足りなかったが、その分今目の前にあるものを見つめられた。子供たちの笑顔、人のやさしさ、人とのつながり。中学校では、1クラス60人の生徒相手に授業をした。かといって教室が特別広いわけでもなく、机も椅子も足りない。1つの椅子に2人の生徒が座る。タンザニアでは中学校から全

ての科目を英語で学ぶ。村の学校の生徒たちには英語は浸透しておらず…教科書の英語を、スワヒリ語を用いて、いかにわかりやすく説明できるかが、生徒の理解に直結した。最初の頃はスワヒリ語の発音を間違え、生徒が大笑いし授業にならなかった。それでも1年たつと、授業を楽しめるようになり、2年の任期を終えて学校を去る時は本当に名残惜しかった。

今私は、千歳市にある動物病院で獣医師として働いている。変化のある毎日で、とても楽しい。元気になった犬や猫を見て喜ぶ飼い主さんを見ると、やりがいを感じる。まだまだ出来ないことだらけの毎日であるが、自分らしく乗り越え、はやく1人前の獣医師になろうと思う。

青年海外協力隊 平成22年度 1次隊
職種:理数科教師(中学校で生物、化学、数学を教授)
派遣国:タンザニア(南東部、ムトワラ州マサシ県ルクレディ村)



私の生徒たち



12月13日(木)、当別町にある弁華別(べんけべつ)中学校(全校生徒16名、石狩郡当別町弁華別429番地)を留学生サポーターの北大留学生や北海道海外技術研修員等3カ国4名が訪問した。

当日のプログラムは生徒たちが話し合いをしながら自分たちで用意したもの。最初は「世界に一つだけの花」を歓迎の歌として披露し、その後体育館に移動してグループ毎に交流。カルタ遊びやジェスチャーゲーム、また「ケイドロ」と言われる鬼ごっこを行った。生徒が日本語と英語で進行したり、またカルタの1枚1枚を手書きで作ったりと、留学生を迎え入れるために一生懸命準備してきたのが伝わってきた。

体育館で一汗かいたあとは全員で昼食作りへ。料理に使うカボチャ、ジャガイモ、人参は中学校で生徒たちが栽培したもの。わさび入りカレーや野菜チップス、かぼちゃケーキなどこちらもグループ毎に準備したユニークな(!?)レシピをもとに、野菜を切ったり揚げ物をしたりしながら力を合わせて準備をした。食事のときにはグループ毎に作った

国際交流会 in 当別町立弁華別中学校

カレーの味比べをしたりと、「食」を通しての交流も大いに深まっていた。

今回参加した留学生サポーターの蔡さん(台湾)は、「留学して4年になるが日本の学校に行くのは初めて。最初は緊張したけどとても素晴らしい経験だった」、また鈴木カリナさん(ブラジル)は「ブラジルにも日本のように家庭科があればいいなと思った。(学生たちが)最初はちょっとシャイだったけど次第に打ち解けてきて、最後には仲良くしてもらえてうれしかったです」と感想を言っていた。

生徒だけでなく教職員の方々も含め学校全体で留学生を温かく歓迎していただき、留学生にもその真心が伝わっていた。



留学生サポーターの蔡さん(台湾)がお国紹介を

さっぽろ 研修員・留学生日記

専門分野の研究を深めるために

ハイエックが平成24年度受け入れた北海道海外移住者子弟留学生の鈴木幸さんは平成24年4月5日、北海道海外技術研修員の小矢沢さんと鈴木由美さんは平成24年6月に来道、それぞれの研究をスタートした。



市民防災センターにて地震等の模擬体験

歯科医の鈴木幸さんは歯科治療だけでは物足りなく思っていたこともあって今回の講座を選んだ。唾液や皮膚からカンジダ、舌がん、口蓋裂などの様々な疾患を見つけることができる内科と口腔外科を併せたような学問だという。味覚障害もこの分野に含まれる。

日本語教師をしている小矢沢さんはさらに上級レベルの教師資格を目指して、日本語教師養成講座において420時間以上の課程を履修した。1日4コマ(1コマ40分)160分、文法や模擬授業を含めた勉強の日々を過ごした。

鈴木由美さんは薬剤師として薬品会社での勤務経験があるが、学生時代に興味をもった食品についての研究を希望して今回の研修を決めた。マウスを使った実験で、食物繊維を摂取した場合腸内の細菌叢の変化やDNAを調べている。2012年秋には日本食物繊維学会で研究成果を発表した。

3月末までの期間、それぞれの研究を深めた。

母国語→日本語の表現の受け止め方にちょっと違いが…

日系社会で生まれ育った3名の皆さんはまったく問題なく日本語を話す。が、日系人同士で言葉を交わす時と日本人と言葉を交わす時、自分の表現が微妙に変わるのに気が付いたそう。これは日本語の持つ特性なのか日本人の受け止め方なのか。スペイン語やポルトガル語の日常表現を日本語に翻訳(?)するとそれを聞いた日本人の反応にちょっと戸惑いが見えることがある。欧米語では挨拶の言葉も短かったり、単刀直入だったり、はっきりしていたりと、「そのまま日本語にすると違和感を与えてしまうようです」と、口を揃えて体験を語ってくれた。「仲の良い人にはズバズバ言えるし、壁を作らない人に対しては直言することができます」と、話す時には瞬間、ちょっと翻訳に手を加えることがあるそう。難しそう。

積丹で初雪体験

鈴木幸さんは6度の来日経験があって北海道にも4度来ているし、鈴木由美さんはアメリカで寒い時期を過ごしたこと



鈴木日出間カリナ幸さん
ブラジル連邦共和国
北海道出身海外移住者子弟留学生
北海道大学大学院造学研究所 口腔病態学講座
において口腔診断学、口腔粘膜疾患の研究

小矢沢 和美さん
パラグアイ共和国
北海道海外技術研修員
札幌国際日本語学院において
日本語教授法研修

鈴木ジュリアナ由美さん
ブラジル連邦共和国
北海道海外技術研修員
北海道大学大学院農学研究院・
応用生命科学部門食品科学分野
食品機能化学研究室において食品科学研究

があって冬の寒さを知っていた。が、小矢沢さんは今回初めて雪を見た。11月に後志管内の積丹町で開催された「国際交流in積丹」に参加し、訪れた小学校で児童たちと交流をしていたまさにその時、窓の外にチラホラと降ってきた。児童たちと一緒に見入ったそう。「雪の六角形の形がはっきりわかりました！」と大感激だったようです。3人は、支笏湖の「氷濤まつり」や札幌の「雪まつり」も楽しんだ。

「いい国です!」

最後にお国自慢を聞いた。異口同音に人は明るく、自然は豊かで、食べ物美味しい、と。ブラジルの「日本まつり」では焼きニシンや焼きイカ、サケのチャンチャン焼きも振る舞われる。ブラジルの二人はブラジル北海道協会に所属している。同会の青年部



パラグアイの「ホルダンス」を踊る小矢沢さん

は「ひぐま会」といって活動的なことで有名である。ちなみにニシンはノルウェーからの輸入もので、イカは近海で獲れるもの。

一方、パラグアイでは毎年「全パラグアイスポーツ交流大会」が開かれ、少年部、青年部、OBなどに分かれてバレーボール、野球、卓球など様々な競技を楽しむ。そのせいか、国内津々浦々の日系人同士のつながりが深く、顔なじみも多いそうだ。

1月末の夕方に集まっていた。元気な話にこちらも元気になった時間であった。



夏の1日、道庁赤レンガ庁舎前で

北海道外国訪問団受入 今年度パラグアイ共和国から



北海道外国訪問団受入事業は今回で20回目を迎え、今年度はパラグアイ共和国から“全パラグアイ北海道人会連合会”の役員として活躍する白沢直樹氏を団長にイグアス市、ラパス市、アスンシオン市から7名の青年が来道した。



大倉山ジャンプ競技場のふもとで

1月30日(水)から2月6日(水)まで8日間の期間中、雪深い北海道開拓記念館、北海道開拓の村を訪問し北海道の歴史、生活・文化等を体験、酪農学園大学では全国有数のGIS情報技術の活用や人材育成の取り組み状況の視察やパラグアイからの留学生との交流懇談を実施、環境や農業分野における先端技術を用いたの取り組みや留学生たちの真摯な姿に賞賛の声が上がっていた。

また、大倉山ジャンプ競技場から見る整然とした札幌の町並み、折から開催中のさっぽろ雪まつり会場では雪や寒さを逆手にとった冬の生活体験にも大満足の様子であった。

帰国を前にした「お別れ会」では、高橋了副会長専務理事が「不撓不屈の精神で生き抜いて来た父母・祖父母から引き継がれた日系人としての誇りを忘れず、今回の経験を活かした将来の活躍を期待します」との激励の言葉をおくった。団員一同、両地域の今後の交流への思いも新たに帰国の途についていた。



留学生たちといっしょに

平成24年度「多文化共生ワークショップ」 ～簡易型災害図上訓練(DIG)を 通して多文化防災を考える (2月2日 土曜日 札幌市)



DIGワークショップ

日本語を十分に解さない外国人のための災害対策として、外国籍市民、外国籍市民支援者、多言語サポーターなどを対象とした防災講座と災害図上訓練(DIG)が行われた。

DIG(ディグ)とは、災害(Disaster)、想像力(Imagination)、ゲーム(Game)の頭文字で、参加者が大きな地図を囲んで書き込みをしながら話し合い地図上で行う防災訓練。その中で被害の想定や地域防災力について考え、災害に強いコミュニティを作っていくとするもの。

この日は、「災害時における外国人住民の現状と課題」と題して(特活)多文化共生マネージャー全国協議会の時 光さん(中国出身。日本在住10年)が、東日本大震災の時に宮城県で津波に遭遇し何が起きたのかかわからない恐怖からパニック状態に陥った外国人旅行者の様子を例に、言葉がわからず情報がないことで緊迫する状況を紹介した。災害時には誰もが困るが、加えて外国人特有の問題(防災に

関する基礎知識の差、言語による情報量の差、地域のセーフティネットの抜け穴などがあるので外国人を支援する必要があると説いた。

後半は(財)北海道国際交流センターの池田誠さんが札幌市内の地図を前に避難所、避難経路、支援が必要な人のいる場所などをチェックしながら避難するシミュレーションを行った。池田さんは、防災に不可欠な3要素は「自助」(自分の命は自分で守る)、「共助」(町の安全はみんなで守る)、「公助」(地域のインフラ整備を進める)であるとし、その割合は順に7:2:1と自分たちの行動が大切と話した。



講演する時さん

DIGは町内会や一定の人数と場所があればいつでも取り組める「簡易型災害図上訓練」で、「災害を知る」、「まちを知る」、「ひとを知る」、「家庭を知る」を掲げる。札幌市では危機管理対策室がDIG



DIGを紹介する池田講師

の資料を作成しており、DIGに関しては各区役所の総務企画課に問い合わせができる。



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック
(旧 社団法人北方圏センター)

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2013年3月5日
TEL.011(221)7840 FAX.011(221)7845 <http://www.hiecc.or.jp>
E-mail: pbl@hiecc.or.jp (調査研究部) intc@hiecc.or.jp (国際協力部)
印刷：岩橋印刷株式会社